



なごや「聖歌」だより2月号2013

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



今月の予定

聖歌練習 半田 2月6日(水)12時ごろから

半田も4部で歌っていきましょう。

名古屋 2月10日代式後。大斎の練習。

名古屋指揮当番

3日エレナ広石 17日ピーメン松島 24日マリア松島

6. 身近な素材を用いる

——現地のことば、ヘレニズム文化

キリスト教は発足以来、現地のことばや身の回りにある異文化の素材や手法を利用してきました。むしろ身近な言語を用いて宣教し、礼拝するのはイイスス以来の伝統で、イイススはユダヤ教の神聖言語であるヘブライ語ではなく、日常語のアラム語で「父よ・・・」と祈れと教え（マタイ6:9-13、ルカ11:2-4）、また使徒たちは五旬祭の日、各国語を話す恩寵を得て宣教に出て行きました。

イイススや使徒の暮らした中東では、アレクサンダー大王の大遠征からすでに400年が経過しておりヘレニズム文化は生活の隅々に浸透し、ギリシア語は準公用語となっていました。新約聖書もギリシア語で書かれ、旧約聖書もヘブライ語ではなく紀元前1世紀ごろアレキサンドリアでギリシア語訳された『七十人訳聖書』が広く用いられていました。

教養人は古典ギリシアの哲学や修辞法、文学、音楽をたしなみ、イコンにはローマやエジプトの画法が用いられ、シリアには優れた詩や歌の伝統がありました。古いイコンにローマの肖像画法の影響があったことはよく指摘されることですが、聖歌の場合にも、その時代に存在したさまざまな音楽、詩、音楽観が影響しています。

2世紀の詩的説教（サルディスの主教メリトン（180ごろ没）の説教）はコンダクの遠い祖先とも言われますが、古典ギリシアの韻文、韻律的テクニクなどの伝統が表現手段として用いられており、簡素で闊達な言語、高揚された表現と手法、豊かな比喩表現、巧妙な話術など後のビザンティン聖歌の基礎となりました。アジアからの影響で、古典ギリシアのスタイルとは異なる、韻律とリズムを分離した新しい歌のスタイルが広まっていました。6世紀のコンダク作者ロマノスはシリア出身で、彼の歌にはセム（ヘブライ）的な伝統も多く見られると言われます。

さて異教文化の所産であるギリシア、ローマ古典文化、巷の音楽は、異質な思想を持ち込み、迷いに導く危険性もあったため、教会は導入にはきわめて慎重でした。旧約聖書には神殿の儀式にハーブなどの楽器を用いたと書かれていますが、教父の中にも賛否両論がありました。当時異教の儀式では器楽を大々的に用いて人間の感情を揺さぶり、恍惚状態にしてマインドコントロールすることもあったからです。たとえばグノーシス派では7つの母音を魔術的にあやつり、テラペウタイ派（治癒派）ではリズムを巧みに用いました。

特に甚大だったのはグノーシス派の影響で、ハルモニウスとその子バルデサヌスは自分たちの教えを歌に作って歌い広め、大成功をおさめていました。それを憂いたシリアの聖エフREMは相手の手法を逆手に取り、正統信仰を相手の音楽に乗せて歌い、正統信仰を広めたと伝えられています。

教会は音楽の導入を許容しましたが、言語によって明確な意味を伝えることのできる「歌」に限定し、人間の感情面にのみ働きかける器楽や踊りは固く禁じられました。教父たちは異口同音に音楽に対することば（ロゴス）の優位性を主張しています。アレキサンドリアのクレメンス(c. 150 - c. 215)は『ギリシア人への勸告Protrepticus』のなかで、半音階的な旋法、楽器の使用、ポリフォニーの禁止を述べています（1章）。楽器不使用の伝統は今も続いており、正教会では基本的に器楽は禁止され、アカペラで歌われ伴奏といえども楽器は用いませぬ。

余談ですが、皮肉なことに西方教会にオルガンが導入される発端を作ったのはビザンティンでした。ビザンティンの皇帝がフランク王国のピピンとシャルルマーニュに贈ったオルガン(757、812)が最初は修道院の練習用として用いられ、後に礼拝に取り入れられました。ビザンティンでは宮廷儀式にはオルガンが用いられましたが、礼拝に持ち込まれることはありませんでした。

ロシア語では聖歌の音楽付けを「翻訳ペレヴオード」といいます。セルゲイ神父のエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

復活祭を「歌う」という考えは旧約聖書に由来しています。神の前では「語ったり」、祈りを「読んだり」せず、歌います。次章「聖なる音楽のひびき」で詳しく述べますが、聖歌には「アイコン」と同じ神学的意味があります。詩とリズムと調を使って描くのは、こぎれいな聖画ではなく、聖なるアイコンです。

音楽の奉神礼的な働きをあげてみましょう。

1. 共働として。祝いのための聖なる会合を招集する。
2. 奉事規程として。礼拝の「動き」と「材料」に実体を与え、時間、場所、空間、次元、関係の秩序を定める。
3. 儀式として。使徒たちのことば、宣教、預言で語られたことの儀式的な本質を取り出し、聖なるメロディによって声を与える。

4. 祝祭として。行われていることに、動きと音によって奉神礼の永遠の鼓動、を与える。



5. 全体として。すべてを統合し、すべての面に完全な見解を与え、礼拝の全体像を作る。参加、註解、訓戒、表現、啓示、神の臨在への教理的応答など、すべての要素が礼拝の流れにそって音楽的にまとめられる。

音楽は礼拝の中で「語り」、「行う」手段です。それは「機密的*」で、ことばの究極の意味で「象徴的*」です。他の目的はありません。ここを押さえて奉神礼音楽に「翻訳」しなければなりません。

*正教会で言う「機密」「象徴」は単に形として、思い出として儀式を行うことではありません。現実の物質を通して、実際にあるものとして引き起こす神秘を言います。聖体礼儀を執行するのはハリストスご自身であって、パンとぶどう酒は、本当に主のお体と血なのです。

参考資料 聖歌の工夫、正教会の伝統の楽譜から考える ズナメニイの楽譜祈禱書



左の祈禱書はズナメニイ・チャント（ズナメヌイエ・ロスペフ）と呼ばれるロシアの古い聖歌譜です。ズナメヌイエとは「記号」の意味で、祈禱文の上にかかれた  や  などです。その上に書かれた小さな文字は朱書きで、音の高さを表します。ビザンティンから伝えられた聖歌がロシアで独自に発展し、17世紀頃まで広く歌われました。17世紀のニーコンの改革後は、ほとんどの教会は西洋音楽の影響を受けた多声聖歌を取り入れ、楽譜も五線譜に移行しましたが、旧儀式派の人々はズナメニイ聖歌を守ってきました。主体は祈禱文で、音の動きが祈禱文に添えられています。近年、伝統聖歌を見直す動きが盛んになり、至聖三者修道院（トロイツキーソボル）など各所で歌われています。またラフマニノフが『晩禱』のモチーフにしたのもズナメニイ聖歌です。

音の高さを表す。ファ

音の高さを表す記号。ソ

同じ音を繰り返す

クルイシュ(十字架)長く延ばして、終止

ストレームラチナヤクイジェヴァヤ(暗い矢、十字架付き)ドレ、レミなど長めの音で1音上がることを表す

ストピーツァ(意味不明)短いアクセントのない音

ストレラ(矢)長く延ばす音

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料